

西北の方向から流れてくる太田川と北からの根之谷川、東北からの三篠川の合流点の北側、可部の町の南端を「中島」という(現在の町名は「可部南」である)。この地域の西側に、国道五四号線として可部と八木・広島方面を結ぶ太田川橋が架かっている。この太田川橋の可部側、国道からそれてJR可部線を越え、数一〇メートル東側に「中島の大権現」、さらに二〇メートルほど東に「友広神社」がある。中島の大権現は「大権現」とのみ刻んだ石塔と左側に小祠があり、正面は友広神社に向いている。

『芸藩通志』には「中島村にあり、是亦社なくして石のみなり」とある。友広神社は、中島のほぼ真中に位置し、現在のバスが通る深川通り(新道から南に入っている。境内には、建設省国土地理院の「一等水準点」の立札がある。『芸藩通志』には「八幡宮、中島村友広にある。村内、田中に小林あり。当社祭日に供物を此地に置けば、神鳥一隻来てこれを喰ふ。他の諸鳥は啄まずといふ。後に鳥喰森と呼ぶ」とある。

友広神社の鳥居前を東に進み根之谷川の土手道に出ず、すぐ左折し北の方向へ進み新道を横断して、旧道をしばらく行くと「超円寺(篠原山)」がある。道沿いに高い木立が一本すっきりと空にむけて立ち、その下に鐘楼がある。江戸時代から明治にかけての堂門が残り、バスが通る新道からはずれているので周囲は静かである。中島と尾和(下深川)とは根之谷川で区切られているが、「根之谷川橋」で結ばれている。「郡中国郡志」に「中島村」の項に「彼岸橋、長拾一間木橋」「秋彼岸に掛春彼岸二落シ申候依而彼岸橋ト唱申候、当村、下深川村尾和ト出合ニ而掛調仕候」とある。現在の橋は、旧道のあり方から考えると、かつての橋よりやや上流に架けられている。

根之谷川橋を渡り、南東の方向にバス通りを進んで行くと、三篠川に架かる「深川橋」に至るのだが、この橋の手前、進行方向左側の山の麓に寺が見える。これが「善徳寺」である。この寺の周囲には見所がいく

つがあるので紹介しよう。まず、善徳寺(銅亀山)であるが、毛利元就が領国支配上、安芸門徒を積極的に認める政策をとったことを背景とし、天文二十一年(一五五二)佐西郡石内(佐伯区五日市町石内)の山村平兵衛の倅超印がやってきて、真言宗教徳坊を改宗して開基(浄土真宗)した」と伝える。境内には市指定重要有形文化財の「銅製梵鐘」があり、鐘銅の陰刻銘によると「寛永十一年(一六三四)に、白神社(中区中町)の神女伊勢が、廿日市の鑄工・山田次右衛門に鑄造させた」ものである。かつては善徳寺前に、舟宿があり「三篠川を往来する川舟の船頭さん達が鐘の音に合わせて歌をつくり、のどを競いあっていた」というのどかな話も残っている。

バス通りから善徳寺に向け折れて行くと、寺の手前の左側に「道標」があり裏の山へ登って行く道がある。道標には「尾和金比羅神社参道」「昭和四年十月吉日」と刻まれている。下深川の氏神として尾和神社には八幡神が祀ってあったが、大正十四年九月一日、亀崎神社に合祀したため、以後金比羅神を祭神とする。「尾和」の地は福島氏の時代より川舟による年貢や物資の輸送の要衝の地で、金比羅神社は信者も多く近郷近在よりたくさんの方がお参りし、祭りの日にはたいそうな賑わいだったようである。参道を登って行くと尾和神社にいたる。『芸藩通志』に「八幡宮 下深川村尾和にあり、慶長五年(一六〇〇)毛利家より神田六畝寄附の文書あり」とある。神社の正面からは三篠川と太田川とが合流する地点がはるかに眺望できる。

この神社の上に続く山は「尾和城(宮首城)跡」である。最高所の標高は七四メートル、城跡の下手、尾和神社付近にも一か所の削平地があり、郭として利用された可能性もある。「郡中国郡志」に「宮首城」「尾和左衛門」「下深川村」とあり、武田氏時代から毛利氏時代に在城していたものと考えられる。

次に、眼下の善徳寺正面の道を進むと三篠川の土手道につきあたるが、



善徳寺前の道標



尾和神社より三篠川と太田川の合流点を望む



旧舟宿(土手道の左側手前の家が田川氏宅)

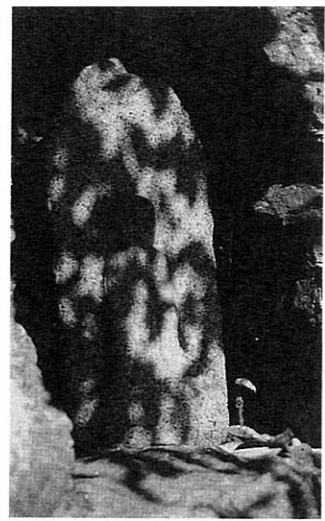
土手道から川を見ると以前の深川橋の橋脚の一部が水面に顔を出している。旧道は善徳寺の前を通っていたことを示しているといえよう。現在のバスの通る深川橋はやや下流にあたる。土手道を一五メートルほど上流方向へ行くと、かつて川舟の宿であった「田川氏宅」が左側にあり、深川橋からこのあたりを「河野の浜」と呼んでいた。『旧安佐郡深川村誌』(昭和六十二年二月十二日・高陽公民館・高陽郷土史会復刻)に「今日ニナツテ予想ノ付カヌ所ニ田川家ノ宿屋ガアルノハ如何ニモ不可思議ニ考ヘラレルケレドモ」舟運ハ当時本村ノ最モ重要ナル否当村ヨリ川上ノ諸村ニ取ツテ唯一無二ノ交通機関デアッタ」とあるように、道を考える場合、川舟を抜きにしてはこの地域はわからない。同書によると、川舟の盛時には「毎夜三十人乃至五十人ノ船頭ガ宿泊シタト云フ」とある。田川馨氏によると「三田の方へ上ってゆく舟を引く人が夕方になるとたくさん泊り、家人は蔵で寝たりした」。また、昭和のはじめ頃「川舟のすたれたあとには旅の芸人などが泊っていた」という。現在の田川氏宅は、堤防の改修工事のため以前より川から後方に引いてあるが、家の前の石段や家屋の壁面に名残をとどめている部分がある。

最後になるが、善徳寺の門の前には「道標」があり、以下のように刻まれている。「下深川駅迄四町」「可部町迄廿二町」「薬師近道十一町」「大正十五年三月二日建立 森下小助」「薬師」とは、後述する深川四丁目「明光寺」境内にある「薬師堂」をさす。道標は、洪水で倒れたままになっていたのを、昭和五十年代に町内会で整備したものである。

次に、三篠川沿いの道には右岸と左岸の道があったが、まず前記の「薬師近道」である右岸の道を薬師さんまで進んでみよう。善徳寺から五〇メートルほど行ったところに地元の人が「ベンガラ工場」とよぶ戸田工業があるが、この工場の横を三篠川沿いに上流方向へ進むと堤防が切れる。堤防を越えると直下五〜一〇メートルのところを三篠川が流れる川沿いの道が残る。幅は三尺程度で中島(可部)より、中深川の薬師さん



金明鉱山選鉱場跡

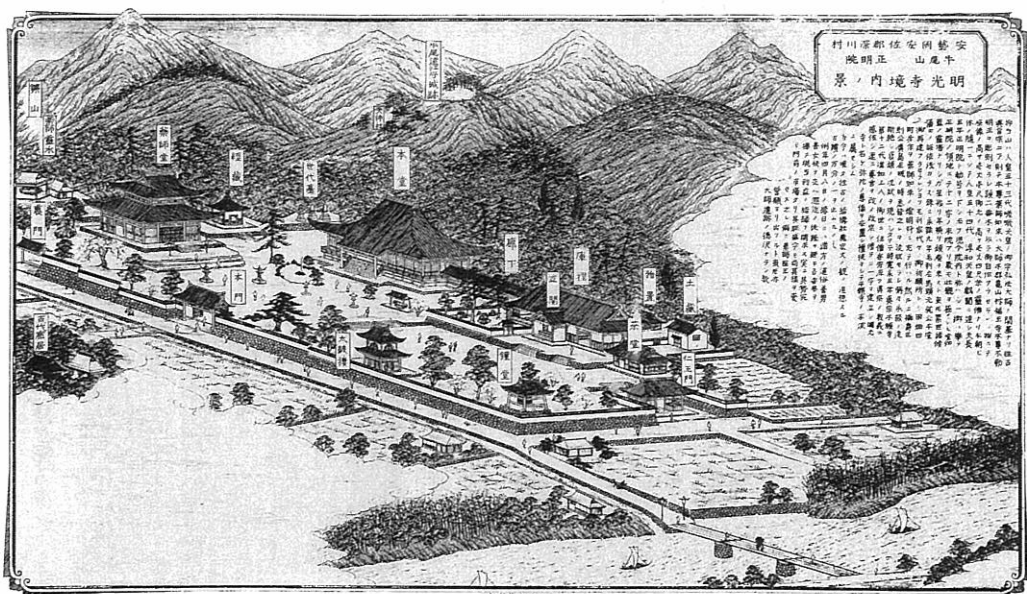


かいじ地蔵

へ行くには、橋を渡って遠道するよりも、この道を歩いた方が近道なので地元の人々はよく使ったという。この道を戸田工業から三〇〇メートルほど進んで行くと「かいじ（海路）地蔵」が左の山側に、大きな岩をくりぬいた穴に置かれている。高さ三〇センチメートルくらい。「可部から院内（深川四丁目）のある屋敷に乳母として毎日通っていた人が、ある日洪水のとき、ここで三篠川に落ちて亡くなった。その霊を弔うために、ここに地蔵が置かれた」と伝えられる。

この地蔵の前をさらに上流方向へ進むと道は途中で切れるが、三篠川の川原の岩場を通れば、再び小道がある。山側は樹木が少ない。これが「金明鉱山跡」であり、しばらく進むと鉱害発生を防ぐために市によって昭和四十四年（一九六九）八月の鉱業権放棄後なされた坑口の閉鎖工事跡が残る。「郡中国郡志」下深川村の項に「金山一ヶ所但マプロ五ツ、右ハ水山ト申伝候、寛永元年（一六二四）山主可部町条光九良右衛門ト申者掘初」と鉱山のあったことが記してある。下深川のトギ山山麓に銀山（かなやま）の字名が残されている。この鉱山が本格的に稼働したのは昭和十五年（一九四〇）以後の銅鉱石の軍需価値の増大に伴う稼働と、戦後の銅地金価格の高維持期間中である。採鉱中は、深川近辺の人が家族みんなで働きに出、三篠川には橋が架かっており、トロッコで運びおろし、下深川駅から芸備線の貨車で積み出されたという。橋は戦後台風で流され、三篠川右岸（北岸）は人家が少ない、ということまで再建されることはなかった（『ふるさと高陽・第一号』勝矢武雄の調査記録、高陽郷土史研究会、昭和六十三年十一月発行と勝矢氏自身に聞く）。

この鉱山跡から先には人家が続き、しばらく進むと大倉谷川に杉原橋があり、この橋の西詰には、「水路記念碑」が、東詰には「右ヤクシ」という高さ五〇センチメートルほどの「道標」が、ひっそりと見過ごされそうにして石垣の左辺下あたりにある。この道標は三篠川から山側に登ったところであり、このあたり（地名を「院内」という）右岸の道は現在の



明光寺境内ノ景 (三村 菊枝氏 提供)

川からかなり山側を通っていたようである。この道標から一〇〇メートルくらい進むと増井清一氏宅(深川四丁目)内に「人穴」がある。「弘法大師がここで雨露をしのぎ、薬師さんを彫った」といわれる。幅三メートル、長さ五メートル以上で天井に大きな石二枚を使用した古墳(向墳)の石室であると思われる。中には土砂が入り草木がしげり、入れない。石室のみ残り、墳丘は失われている。三篠川から五〇メートルくらい傾斜地を登ったところに位置し、川が氾濫しても水はこまではこないのではないかと思われる。石室の入口は川の方向に向いている。「郡中国郡志」には「往古人住候」「大石二而」とある。三篠川右岸のこの地域が古くから開かれ、人々の往来があったことが想像される。

ここから一五〇メートルほど東へ進んだところに「明光寺(牟尾山)」があり、境内に「薬師堂(正明院)」がある。この堂は「永禄九年(一五六六)毛利元就とともに三吉式部少輔隆亮が建立した」ものであり、「毛利氏の祈願所として田地四町歩の寺領が与えられた」。江戸時代には「明光寺抱」となっているが、毛利時代からの由緒もあり、堂・鐘楼・仁王門の修繕・再建は高宮郡普請となっており、特別扱いとされていた。本尊薬師如来は「弘法大師の作で、福王寺の二番木をもって作った」との伝承がある。作風からすれば、福王寺の不動明王像よりかなり時代が下るものであり、形式から室町中期の作と考えられている(「広島市の文化財」四〇頁)。堂の創建は室町時代末とされる。昔から「オヤクッサン」と親しまれ、毎年五月八日の開帳の日には、多くの参拝者でにぎわい、「薬師への道」はこの時大いに使用されてきた。薬師如来像は広島県重要文化財、薬師堂は広島市指定重要有形文化財である。一方、明光寺には「芸藩通志」によると「文治三年(一一八七)書写」の奥書をもつ朱字の法華経が伝わり、「大日本国安芸国北庄深河書写」とこの地域の名である「深川」というよび名が登場している。

薬師堂のすぐ北側の小高い場所には「天神社」が、さらに北側の水田

には「どうどう河原の地藏さん」と「湧水」がある。湧水は、「薬師さんの霊水の源」であり「弘法大師が薬師如来像を彫る際に、ここで体を清めた」と伝えられる。また、眼病によく効くといわれ「八月六日には原爆供養のために、この水が持つて行かれる」そうである。三篠川右岸の古道を通る人々の喉をうるおしてきたのであろう。ここから東の方向に続く山が「院内城(牛尾城)跡」である。「郡中国郡志」には「院内城」「牛尾遠江守」「中深川村」とある。麓にある明光寺の山号を「牛尾山」と称するところからみれば、牛尾氏は戦国期以前より中深川を拠点とした土豪であったと考えられる。「牛尾遠江守」の名は「幸清」とされ、出雲尼子氏の重臣の部将で、武田信実添加到銀山城に入れ置かれた人物であると思われる。武田氏滅亡後も土着の牛尾氏は深川にとどまり、子孫は毛利氏に従って天正十四(一五八六)一五八七)の九州島津氏征服に出陣し戦死したと伝えられる(高陽町史、二一九頁・三〇頁)。

さて、眼下の三篠川には「薬師橋」が架かっている。「三篠川に架かる吊橋で最下流のものは中深川の薬師橋で、昭和二十年(一九四五)頃まであった。吊橋は橋桁をもたないか、せいぜい一つの橋桁をもつ場合が多かったから、洪水の際に流失の危機が少ないこと、川舟の通行の支障にならないなどの利点を有していた。しかし、自動車交通の発達、河川改修による川幅の拡大、架橋技術の向上などにより急激に姿を消しつつある。」(広島県文化百選五道編、八六頁)、『旧安佐郡深川村誌』には「大正ノ代薬師橋ト称スル一ツノ釣橋ヲ三篠川に架シ、コノ長サ五十余間、幅一間、工費五千元要シタリト云ウ、地方稀有ノ奇橋ニシテ」とある。現在はコンクリート製で車の通れる橋になっている。この橋を渡らずに三篠川右岸の消えかかっている古道を進むと割合広い平地に出、新しい家が十数軒建っている。ここが「競馬場跡」である。対岸からは普通車がぎりぎり通れる横川橋が架かっており、この橋の対岸の堤防には、「昭和四十年六月・昭和四十七年七月・昭和五十一年九月洪水のあと」がプレー

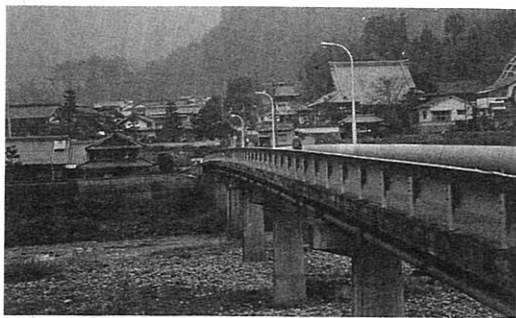
トで記されている。競馬場は、芸備線に中深川駅を誘致するために開設されたそうで、『旧安佐郡深川村誌』に「大正後年頃ハ九州・関西ノ名馬集ヒ毎年舉行(春秋二季)ノ際ノ如キハ人出万余ヲ算スルノ状況ニアリ」と記され、薬師さんとともに三篠川右岸のこの地域に多くの人が集まってくる様子が目に浮かぶ。この競馬場跡から先は、山が川に落ち込むようになっている、古い道が現在では通れなくなっている、右岸の古道はひとまずここで止めたい。

次に、一度あと戻りして三篠川左岸の道を前述した深川橋を渡ったところから上流に向けて進んでみよう。すると山が川に突き出している部分に至る。この山に「亀崎神社」がある。こんもりと樹木の茂る山のの上に拝殿と本殿がある。拝殿に「当初は、旧深川村・狩小川村・福木村の八幡宮の総社にして宇佐八幡宮より延暦十五年(七九六)八月勸請と申し伝ふ。就中永正三年(一五〇六)毛利弘元より、先例に任じ奉幣並に注連役を任せられ、又毛利元就公、永祿元年(一五五八)山林田畠を社領地として寄進し給ふ。当社祭典の節は毛利家より代参し、競馬の的三面、白羽の矢九本奉納を受く。又旧藩浅野家よりも代参せらる」と記してある。『芸藩通志』には「永正二年(一五〇五)毛利弘元より」「慶長五年(一六〇〇)毛利家より九段廿歩の神田を附らる。社職のもの数名ありて、田の所入を配分す。是等の文書、今に持伝ふ。鳥居の額は毛利元就の奉納にして、空海の筆蹟なりといふ」とある。

山の下の方の鳥居の横にはバス停があり、道を横断すると三篠川が流れ、「深川井堰」があり、亀崎橋が架かっている。バス停から可部方向へ数メートル戻ると、「深川堰記念碑」とさらに数メートル先に深川村長として、この堰や「架設橋梁修理通路以便交通運輸」につくした「故山村翁頌徳碑」が堂々と建っている。また、堰よりやや上流には川舟の着いた「馬場の浜跡」がある。さらに、神社本殿の西側、現在亀崎中学校がある所には「亀崎城跡」があり、三篠川が中深川方面から大きく湾曲して、



道標



現在の薬師橋（右側に「明光寺」さらに「薬師堂」が見える）



亀崎神社（山頂）と亀崎城跡（左側）

この城山が道を川に突き落とそうとしている交通の節目のような地点に睨みを利かせていた。城跡は、昭和五十一年（一九七六）に広島県教育委員会が発掘調査を行っており、陶磁器、鉄製品、古銭等の遺物が出土している（高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告）。

このあたりはこれくらいにして少しバス通りを進んでみよう。すると、中深川の町並の入口、道の右側に「深川小学校」の鉄筋校舎が見えてくる。この小学校は、明治六年（一八七三）後述する西法寺に創立された。「洗俊館」を前身とし、明治後半の地図から現在地を動いておらず、戦前の地図では、可部方向の隣りには「役場」があった。この小学校を過ぎ、芸備線踏切の手前で、バス通りから分れて左折すると旧道が残っている。小じんまりとした中深川の商店街となっており、かつては卸問屋として下駄屋二軒、洋品屋一軒、小間物・化粧品屋二軒などがあり、石州の方へ販売していたそうである。この旧道を進んで行くと左側に「右やく志みち」（薬師道）と刻まれた割合新しい「道標」がある。ここで左折して行けば、前述した「薬師橋」に通じるのである。

ここでは左折せずにまっすぐ進んで行こう。すると左側に「西法寺（大倉山）」の大きな屋根が見えてくる。『芸藩通志』には「流田にあり、もとは（中深川）村内大倉谷にあり」「寛文年間（一六六一―一六七三）、今の地に移るといふ」とある。この西法寺の手前二〇メートルくらいの所で右折して小路に入ると、芸備線の線路に向けて「中ノ堂観音」がある。千手観音を安置し、「ヤツデの観音さん」とよばれ、雷除け・火伏せの観音と伝えられる。亀崎神社の祭りのときは、この堂の前で馬ぞろえをし、庄屋さんなどが馬に乗り行列をつくり神社までお参りしたという。

次に旧道を進むのをここで小休止して、南の方向へ芸備線を越え新道（県道三七号線）を横断して行ってみよう。すると中深川駅よりやや南側の中深川郵便局の横からと、駅より五〇〇メートル東側「憩の森 入口」バス停のあたりから峠を登り福田へ抜ける峠道がある。まず、郵便局の

横からの道を登ると、右側に高陽中学校がある。校内には「高陽郷土館」があり事務室に申し出ると見学できる。ここには狩留家・貞広家に伝わる明治四十一年（一九〇八）版の「広島県安佐郡地図」が大きく展示してあり、この地域の様子がつかめる。さらに道を登って行くと市の園芸指導所の手前を上りから下りになる地点がある。ここが「郡中国郡志」の「中深川」の頃に「笹ヶ峠・幸の神・一鉢・祠無御座候」とある「笹ヶ峠」ではないかといわれる。道の右側七メートルくらい森に入った所に「幸ノ神」ともいわれる小さな石像がひっそりと鎮座している。

一方、「憩の森入口」から登って行くと右側に「安便地藏」、左側に「陰地神社」などがあり、一つ東側の谷は「水無し谷」と呼ばれる。この谷には「昔、弘法大師がこの地を通りかかられたとき、ある農家に立寄り水水を請われたが、機を織っていた女の人はさも面倒くさそうに、水はありませんと、断った。大師は、ここは水無しか、と言われ去られたが、その後この家とその付近では一滴の水も出なくなってしまった」と伝えられる（高陽町史「七二夏」）。逆に梅雨どきに出水し「弘法さん水」と呼ばれる。以上二つの道は途中で一本になり「郡中国郡志」に「往還、隠地（陰地）ヨリ福田村道奴田峠迄拾七丁拾間上り坂此内一里ナシ」と記される。「三田ヶ峠」を通り福田へ下ってゆく。

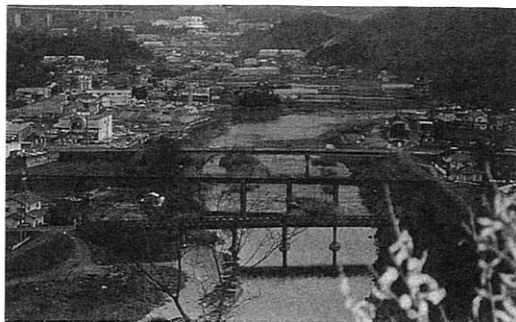
もう一度旧道に戻ろう。この道は三篠川の左岸から数一〇メートル離れているので、三篠川の洪水のたびに整備されていた堤防上の道に西法師の横を通って出てみる。上流にむけて五〇〇メートルほど進んだ横川橋と陰地橋の間のあたりが「西の浜跡」である。前述した福田へ向かう「憩の森入口」からの峠道はここからほぼ真南にあたり、この浜に陸上げた「石灰」を奥迫から福田へと運んだそうである。現在は川原が広く一面お花畑のようである。陰地橋をはさんで右岸には古道がやや残り、この古道から山の斜面を二〇メートルほど登ったところに「もと観音寺の寺地であった」と「郡中国郡志」に記してある「会下観音堂」が

あり、裏はシイタケの栽培場になっている。一方、橋左岸の堤防上の道の一段下には「陰地地藏」がある。往時は「西の浜」に面した竹やぶの前に安置されていたが、河川改修の際川幅が広げられ、昭和四十四年（一九六九）に現在地に移されている。

さらにこの堤防上の道を上流に進んでいくと芸備線にぶつかり旧道と合流する。この合流点付近には「井堰改修記念」の古い石碑が建っており「明治五年二月」「大字中深川井手子中」と刻まれている。また、三篠川には芸備線の鉄橋が架かり、この鉄橋の下流側に「赤石浜跡」が、上流側には「溝手の浜跡」がある。「郡中国郡志」には「往古ハ当村ノ内赤石ト申処三田船継」とあり、三田から下ってきた川舟は、ここで深川の舟に荷を積みかえたのである。さらに同書は「追二川筋附替り漸ク川上エ上り候而只今ノ溝手浜ニ相成申候」と記している。

次に、旧道は「一之瀬橋」のところで新道と交叉する。橋を渡らずに、新道を横断すると、三篠川左岸沿いに上流へ進む道があり、途中までは砂利が敷いてあり車が通れるが、先は草に埋もれそうになり牛舎があり「丁（ようちう）」という集落に至る。この道は、近世に小河原に川を渡らずに行ける補助路として利用されたようであるが、丁から先は、今では山が川と接し道は途切れてしまっている。この山のむこう側には、三篠川と小河原川が合流する地点があり、「落合の浜跡」「下の浜跡」がある。大正まで、この舟着場からは小河原地区の農産物を広島に運び、帰りは地区民の注文の品を持ち帰っていた。特に石灰等は志和方面の分まで持ち帰り、この荷物は負子で背負い、鍋土峠・湯坂峠を越えて運んでいたそうである。

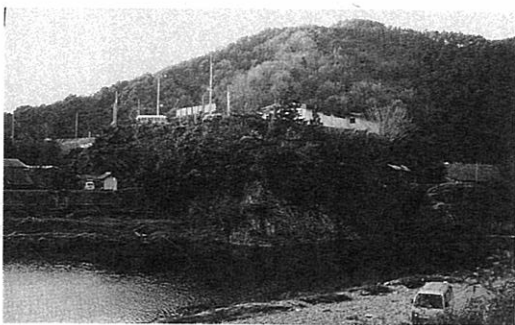
さて、「一ノ瀬橋」に戻り、橋を渡って新道を進むと左側に旧道があらわれてくる。この道を進んでみると、左側にこんもりと樹木の茂る「庄原神社」の鳥居が見える。この鳥居の手前、樹木の中には「しんそうじさん」（お薬師さん）がある。「芸藩通志」に「廃真倉寺、上深川村にあり、



七曲城跡から南を望む（遠景は福田方面）



吉川興経・墓（屋敷跡）



横山城跡と三篠川

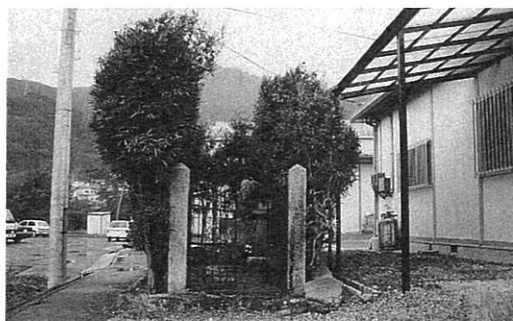
銀山城、主武田氏の菩提所なりといふ、今地藏堂一字あり」とあり、「眞倉倉寺」の地に現在のお堂を建ててお祭りしたものはあるまいか。「眞倉」は「しんそう」と読める（ふるさと高陽・狩小川編）二三頁 広島市高陽公民館・一九九一年三月発行）。庄原神社をすぎると前方に古い「鳥越橋」が見える。この橋の直前左手には、祭りのときに牛に飾りをつけて奉納するならわしがあったという「龍の堂（滝の堂）さん」がある。お堂の中をのぞくと牛の頭骨らしきものが祀ってある。この龍の堂にむかって左手には、現在高陽自動車学校になっている「横山城跡」が、川沿いの奥手には「七曲城跡」がある。七曲城は、登り道の入口が雑木と草におおわれ見つけづらいが、入口付近には張り石のようなものが残っており、七曲りして頂上に至ることができる。標高九三・八メートルあり、川と狩留家方面、福田方面、下深川方面へむかう道がすべて眺望できる絶好の位置を占めている。次に、昭和六年（一九三二）に架けられて以降洪水で流されていない「鳥越橋（鳥声橋）」を渡り進んで行き、右に折れると上深川駅がある交叉点に至る。

旧道を上深川駅に折れず交叉点を通過すると、右側の家から奥に入っていく小路がある。この小路に入り一五メートルほど行くと、白い壁に囲まれた「吉川興経・墓（屋敷跡）」がある。吉川興経は、大永・天文の頃（一五二〇年代～一五三〇年代）の吉川家の当主。叔父らによりしりぞけられ、毛利元就によって上深川の地に隠居させられた（元就の次男・元春が吉川家の養子となり当主になる。天文十九年（二五五〇）九月、陶隆房（晴賢）が大内義隆を倒そうとしている頃、元就は熊谷信直・天野隆重に命じて二十七日に興経を攻撃させた。不意をつかれた興経勢は、豊島五人兄弟などが活躍したが、ことごとく討死、または自害し果てる。興経の墓所は、千代田町中山、浄仙寺山の一面にもある。のちに深川から移葬したのかもしれない。ともかく、墓は毛利氏が吉田郡山から広島へ移り、広島への「深川温品道」が整備されていく前史を物語っている。このあたりには

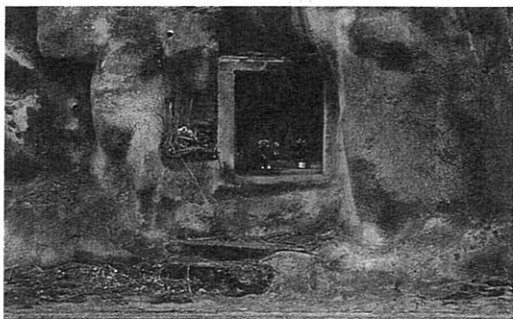




相撲とり塚



豊島兄弟墓



抱岩の地蔵

興経に關係する旧跡が残っている。

さきほど通過した交叉点に戻り左折すると、「ゼコー縫製」の工場があるが、この工場の横には「豊島(手島)兄弟・墓」があり、一坪強の敷地は手入れがよくきれいな花が生けてある。また、旧道をしばらく進むと新県道と交叉するが、この交叉点の山側の上芸備線椎村山トンネルの上には「吉川興経の子・千法師と乳母の墓」がある。また、新県道に戻り、福田へ分れる交叉点にあるガソリンスタンドの側面の塀の横には「森の木(森垂大明神)」がある。「郡中国郡志」には「友光鋒垂大明神一社、梁桁方一尺茅葺、吉川興経公祭申候」とある。福田への分れ道は、もともとはこの「森の木」の位置より二〇〇メートルほど狩留家方向へ進んだところである。旧道から上深川駅にむけて折れる福田への道が芸備線、新県道を越えて南下していき、新県道を南へ横断した所にある「友光神社」がその目印となる。近くには弥生時代の「上深川遺跡」があり、出土した土器は太田川流域の弥生後期土器の標式とされている。

さて、次に旧道が新県道と交叉する椎村山トンネルの所に戻ろう。この交叉点の山肌にはコンクリートが吹きつけてあるが、この山肌を箱型に掘って「抱岩のお地蔵さん」が、自動車の排気ガスをあびながら二体取められている。「抱岩」という地名の起源には二つの説がある。一つは「往時、間道は三篠川の急流がぶつかる川沿いにあつて危険なため、岩を抱いて通らなければ通れなかった」というもの、もう一つは「毛利氏が吉田から広島地方に出ようとすると、上三田付近には尼子氏の残党が残っていて毛利氏の進出をさまたげていた。毛利氏が残党を征伐した際、幼な子を抱いた乳母がこの地まで逃げのび、追手に捕らえられそうになった。乳母は幼な子を穴の中に入れ、その上に岩を置き自分はその岩を守った」というものである(『ふるさと高陽・狩小川編』一九五頁)。

この抱岩の地蔵を右手に見て、新県道を横断すると、旧道が芸備線より山側を通過して狩留家へむかっている。はじめは車が通れる幅であるが、



梨峠付近



旧割庄屋宅



御本陣の門標(黒川章男氏蔵)

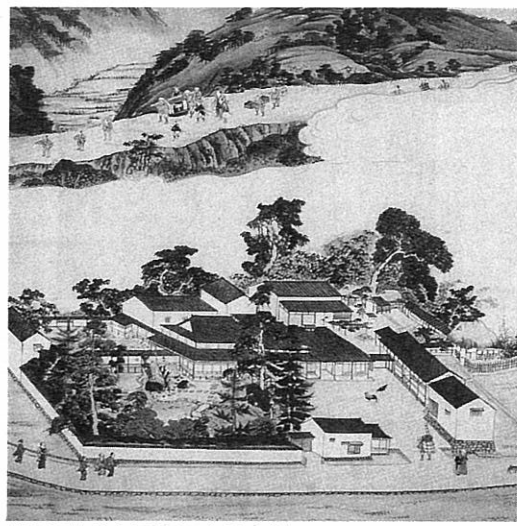
したいに人だけが通れる幅になる。そして、三篠川に面して「狩小川小学校」が眼下に見える越原地区に至る。狩小川小学校は、明治四十二年(一九〇九)には現在地に建てられている。また、新県道をはさんで山側には「役場」があったそうである。山沿いの古道には、眼下に狩小川小学校が見えなくなったあたりに「相撲とり塚」がある。高さ一メートル・幅三〇センチメートル「相生塚」「寛政九年」と刻まれている。昔、大畠(大資産家)にかかえられていた相撲とりの墓であろうといわれている。また、この塚の前から上深川に向うあたりが「梨峠」と呼ばれていたようであり、「研屋」から椎村山のトンネルの上を通り友光神社わきの山下家の横に抜ける道が往還道として重要視されていたそうである。今は、芸備線沿いの山側に点在する墓地と墓地を結ぶ、墓参用の道のような感じである。越原を過ぎてしばらく行くと「狩留家」である。

新県道から左側(三篠川側)に分れて旧道が狩留家の古い町並みに入っていく。交通量の多い新県道が町をはずれているために、ひっそりとした佇まいである。町並みに入ってまず左側に大きな屋敷がある。これは、江戸時代に割庄屋をつとめた屋敷である(現・黒川氏宅。広島城天守閣の資料館には、黒川氏蔵の「広島藩十一代藩主・浅野長訓(ながみち)(藩主期間・安政五年―明治二年)が宿泊」したときの「御本陣」の門標や「高札」が展示してある。

この黒川氏宅の手前を左折して進むと、湯坂川に橋が架かっており、さらに進むと三篠川に架かる西中橋に着く。この橋のすぐ下流で、湯坂川が三篠川と合流しており、この合流点と橋との間に川舟の「舟着場跡」がある。ここへは、志和方面から湯坂川に沿い米などが運びこまれたそうである。ここで「三篠川の真中に石をのけた川舟の通り道があった。川原を綱で舟を引く人が通った。稲作で水を使わない秋から春にかけて川舟が往来した」とのことである。また、西中橋のすぐ上流にも「清水ヶ浜」とよばれる舟着場跡があり「芸備線が出来る前には、広島師団へゆく兵士を



狩留家の旧道と芸備銀行支店跡



藩主松茸狩之図(黒川章男氏蔵)

この浜から送り出していた」そうである。川の左岸の土手道下には「中須賀大歳神社(住吉大明神)」がある。三篠川の川舟の往来が盛んになり、豊田・世羅・賀茂郡の各村からの年貢積み出し米・その他の諸荷物の輸送により、狩留家が繁栄していくなかで「住吉大明神」として信仰されるようになったのだろう。

再び、黒川氏宅前の旧道に戻り、町中を進んでみる。すると、左側に郵便局があり、その前に小さな「胡子神社」が出迎えるように所在する。さらに数メートル進むと湯坂川に「長早(ながまち)橋」が架かっている。長さ五メートルほどの石橋で「大正十一年三月架換」の銘があり、狩留家のひっそりした古い町並みに、このこじんまりとした橋はよく似合っている。橋を渡って数十メートル進むと右側に古い洋館風建築が目を引きつける。これが「芸備銀行支店跡」であり、かつて交通の要衝として経済的に繁栄していたこの町の歴史が偲ばれる。そして、このあたりから右折して、芸備線を渡り、新県道を横断して湯坂・東広島市の志和方面へ通じる道が出ている。

新県道との交差点付近のバス停に面しては、行基作と伝えられる「志和林薬師」がある。「湯坂口」から数十メートル進むと、「安芸国の守護・武田氏一族の重順という僧が天文五年(一五三六)に建てた」という「順正寺(城平山)」がある。石垣の上からは、湯坂から志和へむかう道、また途中分れて「鍋土峠」から小河原へ下りていく道が見下ろされる。順正寺の裏山には、川舟交通と関係の深い「金毘羅さん」が草に埋もれるようにして建ち、「琴平山城跡」がある。湯坂には、字名が「たたら」という所があり、斜面には「かなくそ」がころがっている。「たたら跡」がある。年貢米とともに人や馬の背に負われて狩留家へ鉄が運びこまれたのだらうと想像される。「鍋土峠」には「鍋を鑄造するための土が沢山でて、鍋を造る職人が住んでいた」という伝説が残っている。

最後に、中深川の競馬場跡をすぎたところで切れている三篠川右岸の道について、簡単に触れておきたい。前述した庄原神社のある地域は右岸の道が中心であるが、鳥越橋からは中心が左岸の道へ移る。しかし、上深川では、右岸の畑地区に古い道が残り、畑地区の東端にある「竜明神社（竜ノ蔵さん）」を過ぎ平地がなくなる所では、三尺道が山を越えて狩留家の西地区に通じている。西地区の平地に出ると「おんばんさん（黄幡さん）」が迎えに来てくれ、しばらく道を進むと「おんちやくさん（着權現）」が、山側の小高い所に十年くらい前に建てられたコンクリートの囲いの中に収まっている。さらに進むと山側に「中西の観音堂」があり、三篠川までは二〇〇メートルくらいの幅の平地に水田が広がっている。地元の人によると、「この水田の中に古道が通っていた」とのことであるが、今では畔道と区別がつきにくくなっている。さらに進むと山と川との間の平地は狭くなり「西八幡神社」の手前で平地がほとんどなくなる。

さらに進むと、やや平地があらわれてき、上西橋の手前の山側に「紅梅の天満宮」のひなびた小さな祠がある。さらに進んで行くと、三篠川右岸の道と左岸の道を結ぶ「柳瀬の吊橋」に至る。この橋は、東詰にある大下さんの父親らが栗の木でつくった吊橋が「昭和四十年（一九六五）の大水で流されたため、翌年、翌々年頃今日の吊橋が架けられた」とのことである。これより先は、右岸の道を吊橋の位置から一〇メートルほど草をかきわけて進み、今にも朽ちて落ちそうな二本の板がわたしてあるだけの木橋を渡る。そして、二〇メートルほど草の中の三尺道を進んだ所の川岸に残る大きな岩に「蛇かごを組んで橋台を造り板を渡した」（『白木町史』二一八頁）橋が使用されたそうである。そして、水が出るたびに流され、架けかえる作業をくり返していったらしい。この右岸の道は、左岸にある広島・三次を結ぶ県道のものになった「樽崎街道」が明治十六年（一八八三）に「幅員二間の大道」として完成するまで往還道として重視され、昭和五十年（一九七五）くらいまでは使用されていたらしい。

しかし、今は山仕事もほとんどしなくなったので、かろうじて草木の間に残っている程度である。